

---

# 夢審査

黒漆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢審査

### 【コード】

N0953G

### 【作者名】

黒漆

### 【あらすじ】

夢を研究する博士、彼は言う。夢は脳によって無意識下で改竄かいせんされているのだと。その裏には真実の夢、記憶が存在するのだと。装置によって解明される夢の内容とはどんなものなのか。

**(前書き)**

本文はグロテスク表現が含まれます、ご注意ください。

私が博士の部屋を訪れたのは彼に個人的な用件で話があると呼ばれていたのである。以前、博士の助手を勤めていた青年は、突然の辞表を突きつけて辞めてしまったのだという。その噂を耳にしていた私は、何かの実験に付き合わされる事を少なからず想定していた。何が原因で助手の青年は辞めてしまったのか、恐らくその実験とやらが原因で彼等の仲に決定的な何かが起きてしまったのだろう。そういつたいざこざは私の苦手とする所だ。しかしながら、以前から博士と交友のあった私は、博士の研究内容にも興味を抱いていた為に、誘いに対して拒否を現す事無く会う事を了承していた。

実験室は様々な機器が立ち並び、元々そう広くない部屋が更に狭く思えた。断続的にカタカタという音が部屋に鳴り響き続けている。窓は暗幕のような黒いカーテンによって遮られている為、昼でありながら暗かった。部屋の中は天井の淡い色の蛍光灯によって薄ら浮かび上がる程度に照らし出されている。どうやら蛍光灯にはフィルムのような物が張り付けられている様だった。部屋の奥に向かって電子機器から伸びたチューブ線が天井を這う様に延びていて、その先にヘッドギアのような形状の物体が金属のフックに固定されていた。博士は部屋の中央の背もたれ椅子に座り込み、私を確認すると手を招いて移動式の椅子に座らせた。

「今日はお呼び頂いて有難うございます」

私が形式に沿ってそう博士に挨拶すると、博士は礼を言うのは私の側だ、早速で悪いが、君を呼んだ理由を説明しよう。まずは、今日行う実験の趣旨を説明しなければならぬ。と私に向かって言い、会話に取り掛かり始めた。私は予想していた事が現実に成りつ

つある事に対して頭の中で笑みを浮かべ、博士の言葉に相槌を打ち始める。

「君は夢を記録すると記憶が破壊される、といった話を聞いた事があるだろうか？」

「はい、夢を何かの媒体に記録して残し、本当の記憶として残してしまうと色々と問題が起こりうる、確かそういった話だったと記憶しています」

「ふむ、大体の所ではそんな内容だろう。人は脳の中で夢というプロセスを経て、一日の中において、記憶として残して良い内容と残してはならない内容を選別している。本人が覚えているつもりでは無いとしても脳の中では無意識下で覚醒中、一日の中で見た景色、会話、一分一秒間の出来事すべてを記録している。そのままでは脳の記憶容量を簡単に消費し尽くしてしまう。そうならない理由が夢によって不必要な記憶が削除されているのだと、夢とはそういった役割を備えた作業なのだ。しかし、夢を記録する事によって残しておくべきでない記憶までもが残ってしまう。それにより脳に大きな障害が起こりうる。概ねそんな内容だろう、しかしね。夢の内容を記録したところで実際の所は本人に何の影響も残さないのだよ」

「何故です？脳の記憶容量は無限では無いのでしょうか？」

「脳の記憶容量は人によつての個人差がある、特異的な例を挙げれば、サヴァン症のある男は36年間の全ての出来事を脳に記憶しているそうだ。彼はそう有りながら日々脳が平常で有るそうだよ。発狂や崩壊を免れている、相当の負担がかかっていると予測できるだろうが、不思議だろうか？それは又、私の研究とは別の話だがね。話を戻そう、記憶容量を超える事によつて脳が破壊される事など有

り得んのだよ。そもそもその為に人の脳には忘れると言う機能が  
いておる。それと、脳に関してはまだ未解決の領域が数多く存在し  
ているのだからな。もし、記録によって破壊が起きたとするならば、  
恐らくそれは精神的な圧迫が大部分関係しているのだとわしは推測  
する」

「なるほど、博士は夢と脳の関係についての研究をされているので  
したね。そういった話が今日のその実験に関係する訳ですか」

「そう、これを説明するにはまず、先だつて夢と言うもののメカニ  
ズムについて説明せねばならない。夢と言うものは無意識下で何ら  
かの脳の運動が繰り返されていると言う事は間違いの無い事なのだ、  
しかし、覚醒時記憶として残る夢は本当の夢を改竄かいざんした物なのだよ。  
それは脳の機能の一つなのだが、覚えておいてはならないと脳が判  
断した記憶、または雑多な必要のない記憶を選別し、脳が暗号化し  
た結果、継ぎはぎの様な夢に変換されるという方式なのだ。しかし、  
暗号化されている夢とは言え、一概に本体の精神状態、或いは肉体  
の状態に関係がないとは言い切れない」

「では、もし私がどこからたとえば飛び降りる夢を見た、と言っ  
たらそれは新しい環境下で緊張を感じている、と解釈する事も間違  
いでは無い訳ですか」

「確かに、間違いではない。しかし、それは夢の全体像の一部を暗  
号化した末に上書きされた記憶なのだがね。肉体からの警告を記憶  
の表層に重ねたに過ぎない。人体が何らかの病原体の脅威けんちやうに晒され  
た時、或いは肉体の緊張度が最大に達した時などはより顕著けんちやうに表層  
の夢に反映されると言う事は立証されている。まあ、表層である、  
と言う点に限ってはわしの判断なのだが。わしは真実を解明したく  
なった、覚えておいてはならない記憶とは何なのか、君は気になら

ないか？ 一つ面白い話を聞かせよう、脳は人間が起きている間、実は有る作業を秘密裏に常に行っていると言うのだ、それは視覚しているにも拘らず、脳が視覚されたものを遮断する、<sup>かかわ</sup>と言う話だ。言わば、脳が見てはならないものを見ないためにプロテクトをかけていると考えれば良いだろう。しかし、稀にプロテクトがかけられない人種が居る、それが霊能者などと呼ばれる存在なのだ。わしはオカルト信者ではない。これも一つの可能性として上げているだけなのだが。けれど、我々の脳が拒絶する透明人間の様な存在が居るとしたら面白いとは思わないか？ わしが予想するのは本当の夢、改竄されていない夢は恐らく、昼の間に映し出した真実の記憶、その映像なのだよ。わしは色々な可能性を信じ、どれが正しいのかを確かめたい。そこでこのヘッドギアを開発したのだ」

博士が部屋奥のチューブの先、金属のフックに掛けられた物体を見つめた。気のせいか断続的に続いていたカタカタという音のリズムの間隔が変わった気がした。瑣末な事だと思い、私は会話を続ける。

「この装置の効果とはなんなのですか？ 一見して頭に装着すべきもの、それ自体は理解できるのですが」

「見てのとおり、これは頭に装着して使う装置だ、これを使用している間は常にこの装置内では脳波を測定してある。睡眠がレム睡眠とノンレム睡眠に分けられるのは知っているだろうね？ レム睡眠は高速眼球運動睡眠と呼ばれる睡眠中に我々は夢を見ている事になる。脳波がレム睡眠の反応を示した時、同時に特殊な微弱電磁パルスを発生させる。そのパルスの発生により、脳の記憶処理作業を一時的に停止させる事が叶うのだが、それによりわしが昨日の眠りから覚め、今日覚醒していた間の記憶の暗号化を防ぐ事が出来るはずなのだ。これでわしは本当の夢、いや本当の世界を確認できるはずだ」

「博士、疑問なのですが、そこには当然記憶すべきでない内容が含まれているのですよね。最悪、その内容によっては相当のリスクを負う可能性も有るのでは？」

「当然その可能性は高い。それゆえわしはこれを他人に任せるわけにはいかぬのだ。その為に君を呼んだ。わしがこれをつけて寝ている間、何か異変が起きたならばすぐに対応をして欲しい」

「予想はしていました。博士の頼みごとを私が断れるわけがありません、それに私としても好奇心を大いに掻き立てられる実験のようです」

「そうか、やってくれるか。君ならばそう言ってくれるだろうと信じておった。よろしく頼むぞ」

ふと、私は助手の噂を思い出した、何故彼は辞めてしまったのか。

「ああ、そういえば彼、あの助手の青年は何故辞めてしまったのです？」

「彼は見える様になってしまったのだよ。はは、研究者が霊能者に変るなど馬鹿馬鹿しい話だ。彼は試作機をテストしていた。その内、霊が見えるなどと言い始めてな。わしも辟易へきえきしていた、やがて完成機が出来上がった頃、彼は辞めてしまったのだ。そう、彼も興味深い言葉を残していったな。霊能者もまた、完全にプロテクトが解かれていない、装置が完全ならば何が見えるのか、自分はもう限界だと。わしはそれでも諦めたくはないのだよ。研究者とは時に己の限界をも超える事が必要になる時が来る、そう思うだろうか？」

博士はそれだけ言い、椅子をヘッドギアの横まで移動させ、背凭れを後に稼働させて横になるとヘッドギアを装着して横になった。やがてヘッドギアの横部にあるスイッチに触れ、私の顔を見つめた。

「わしはこれから睡眠に入る、後の事は君に頼んだ。君はただ観ているだけで良い。結果を期待していてくれたまえ」

そう言い残し、<sup>まぶた</sup>瞼を閉じる。蛍光灯の淡い光が博士の横顔を断片的に照らし出す。私はそれを見つめてこれから何が起ころのか、どんな結果がもたらされるのか。それを嬉々として待ち続けていた。

私は待ち続けた。博士は未だ眠ったままだ、時折規則正しい寝息を立てている。例の計器の音の間隔が徐々に早まり始めている事に私は気がついていてた。そろそろだろうかと腕の時計を見つめる。博士が眠って約一時間半、私が博士の横顔に視線を戻すと博士が瞼を開いていた、激しい眼球運動が始まりだしている。

なんだ？ 何が起きているのだ。博士の異常が私の思考の継続を救ってはくれない、その間にも瞳は何も捉えることなく、高速で上下左右に動き続けている。その内瞳が赤く変わり、涙腺から血が流れ始めた。私は流石にこれ以上はまずい、そう判断し、博士の体にしがみ付き、その体を横に揺すった。

「博士、大丈夫ですか？ 起きて下さい」

博士は椅子から上体を起き上がらせると片手で私を突き放し、顔をかきむしり叫びだした。私は咄嗟にヘッドギアに繋がったチューブを掴み、博士のヘッドギアを強引に引き剥がす。

間に合っただろうか、博士を正常に戻そうと博士の正面へと向か

おうと体の向きを変える。しかし、既に遅かった。博士は断末魔の絶叫のような声を一言放ち、立ち上がって激しく頭を左右に振り乱すと、昏倒するように床に崩れ落ちた。その後髪入れず、部屋の窓ガラスの全てがガタガタと揺れた。異常が起きてたったの3分、彼がどんな夢を観て何故発狂に至ったのか。私はすぐに倒れこんだ博士を抱き起こし、顔を覗き込む。博士の赤い眼、瞳の中に世界の姿が反射して映っている。その瞳の中に私の後に立つ透明な何かが映り込んでいた。私は目が離せない、ゆるゆると動くそれは私に近づいて……

気がつけば私は呆然と立ち尽くしていた、どれ程の時間が経ったのか、私は憶えてはいない。窓のカーテンが開かれて夕日が差し込み、部屋をオレンジに染めている。博士の姿は何時の間にか消えていた。床に有るのは僅かな血溜まりと引き千切られたチューブ。ロボロのヘッドギアだけだ。実験室は静寂に包まれている。機器が活動を停止したのか、あのカタカタといった音が止んでいる。自然に私は装置へと目を向ける。しかし、装置の電源は未だ切られてはいなかった。フラッシュバックの様に、博士が最後に叫んだ声の中で復唱される。

「世界は侵されている、何故わし等は、わし等の脳は現実を否定するのだ」

窓ガラスがカタカタ、と鳴った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0953g/>

---

夢審査

2011年1月26日02時21分発行